



薬師仏を形容する宮澤賢治の紫磨金色

宮澤賢治は、薬師瑠璃光如来を形容するために「紫磨金色（しまこんじき）」という色名を用いている。

『新校本宮澤賢治全集』（第一巻短歌・短唱本文篇、24頁）で「東には紫磨金色の薬師仏／空のやまひにあらはれ給ふ」（短歌156）と詠う。賢治は、夜明けに黄色い光を放つ空に気づき、空が病気を患っていると感じ、病気を治すために東方浄瑠璃教主の薬師仏が姿を見せられた、と詠っている。

賢治は、薬師仏の肌の色が紫磨金色に輝いていると描写している。紫磨金色は、紫色を帯びた最上質の黄金が放つ輝きを意味する。

その紫磨金色という表現は、賢治が新しく作成した色名ではない。『浄土三部経』（岩波文庫、全2冊下巻、1990年改訳）の『観無量寿経』では、阿弥陀仏（無量寿仏）の西方極楽国には七宝の池があり、その大きな宝玉の美しい蓮華の蕾の胎内で一夜が過ぎ、夜が明けると蓮華の花弁が開き、上品中生の「行者の身、紫磨金色となり、足の下にもまた七宝の蓮華あり」（71頁）と言及されている。

紫磨金色に輝く仏身は常に柔和で、いかなる恥辱や迫害にも耐え忍ぶ相を持っていると考えられている。 (吉村耕治)

●城一夫名誉会員を偲んでー 11

城一夫著 新装版「色の知識」

青幻舎発行 定価 2,530円

初版：2010年6月（新装版2020年4月）

本書は、古代からの美術・デザイン様式に見られる色の変遷や、名画を生んだ画家たちが好んだカラーパレット、人名やブランド名を冠した色名、世界30カ国の文化や生活にまつわる色の旅物語など、多彩な切り口で色に親しめる「色彩の手引書」であり「カラー事典」でもあります。

初めてこの本を手にした時、装丁の美しさとびっしり並んだ色名にワクワクしたのを覚えています。西洋絵画や装飾デザインを鑑賞することは好きでしたが、恥ずかしながら、時代や様式を混在して観ていました。著者やこの本と出会ってからは、ゴシックやルネッサンスなどの美術様式や絵画表現を系統立てて理解でき、アート鑑賞の楽しみ方が広がりました。「色の知識」というタイトルではありませんが、まえがきには「色彩は知識ではなく、感受するものである」とあります。

著者から「絵画を観る時は、色や形で表現された画家の心情を難しく考えずに素直に感じてみよう！」とアドバイスをいただいたことも思い出されます。 (中塚陽子)

●大辞泉ひろいよみ 22ーう

鶯色：染め色の一。緑に黒茶のまじったウグイスの背の色に似た色。鶯茶。

鬱金色：うこんいろ。ウコンの根茎で染めた濃い黄色、また、そのような鮮黄色。

鬱金粉：ウコンの根茎を乾燥し粉末にした黄色染料。

鬱金木綿：鬱金色に染めた木綿。

潮染め：うしおぞめ。浴衣地を紫色を帯た濃い紺色に型染めしたもの。

丑紅：うしべに。寒中の丑の日に買う紅。口中の荒れを防ぐといわれる。寒紅。

薄青：かすかに青みを帯びている色。染め色の名。淡い青色。空色。古代・中世では淡い緑色をいった。織り色の名。縦糸は青、横糸は白。襲の色目の名。表は薄青、裏は白。また、表は縦糸が白、横糸が青、裏は薄青。

浅緋・薄緋：うすあけ。あさあけ。

薄い：色や光などが濃くない。

薄色：染め色の名。薄紫色。織り色の名。縦糸を紫、横糸を白で織ったもの。緯白（ぬきじろ）。襲の色目の名。表裏とも薄紫色、または表は薄紫色、裏は白。

薄柿：柿渋で染めた薄い赤茶色。薄柿色。また、その色をした帷子。

薄書：薄い墨で書くこと。薄墨。 (永田泰弘)